

られた。直接法は間接法に比べ、PAIgGの絶対量が求められない欠点があるが、正常血小板との相対的な値は得られるし、その上標準曲線が不要であり、また短時間のインキュベートで安定した値が得られるなど有利な点が多いことが判った。

32. CEA-RIA で検出された CEA 自己抗体例の検討

宮崎 忠芳	(京府医・臨檢)
梶田 芳弘 八谷 孝	(同・二内)
越智 幸男 細田 四郎	(滋医大・二内)
浜津 尚就	(同・放)

われわれはすでに CEA と α_1 -acid Glycoprotein (A. G.) が免疫学的に交叉反応を示す部分を共有する事を報告した。今回 CEA の自己抗体 3 例について、CEA の特異性を検討した。各種 125 ICEA (Roche CIS, Eiken, Dainabot) はウサギに免疫して得られた抗体よりも弱い抗体価である自己抗体と PEG 法で沈澱した。CEA 自己抗体血清から Protein A を用いて IgG を精製し、この IgG を用いて 125 ICEA と AG 抗体 (ダコー) の結合に及ぼす自己抗体の阻止反応を検討した。IgG は患者血清 0.02 ml に相当する量を用いた。 125 CEA は患者 IgG が強い displacement を示し正常人 IgG では displacement はほとんど認められなかった。この事は CEA の AG 部分への AG 抗体の結合が CEA 抗体、すなわち non-AG 部分 (P) に対する抗体で抑制される事を示唆している。今回の実験結果より、患者血中にある CEA 抗体も AG determinant をもつ CEA と特異的に結合する事が判明した。この事から CEA の特異的な immune determinant は AG であることが示唆された。

最後に御教授、御助力を賜りました大塚アッセイ研究所の中嶋先生に深謝致します。

33. 脳 RI アンジオグラフィー上の“flip-flop”現象と脳血管写所見

島村 修 井上 康則 松浦 佳子	(京都洛東病院・内)
足立 晴彦	(京大医大・二内)

脳 RI アンジオグラフィーにおいてみられる flip-flop 現象について、Fish らは側副循環の発達を示すものと

し、Barrett らは閉塞性脳血管障害の予後良好な徴候としており、前田らは脳梗塞の急性期に出現する頻度が高いと報告している。

われわれは、flip-flop 現象をみた自験例で、脳血管写を施行した 10 例について検討した。

対象は 48 歳～72 歳の男 8、女 2 例で、症状は、左片麻痺 7 例、右片麻痺 3 例、これらは歩行不能の重症例 5 例、装具使用にて歩行可能な中等症 3 例、独立歩行可能な軽症 2 例であった。CAG 所見は、右内頸動脈閉塞 6 例、右中大脳動脈閉塞、右内頸動脈強度狭窄、左内頸動脈強度狭窄、左内頸動脈軽度狭窄それぞれ 1 例で、8 例には RAG と CAG を 5 日以内の間隔で行った。発症後の期間は 4 W 以内のもの 6 例、4 W 以上 4 例であった。

10 症例の脳血管写所見は閉塞部位や狭窄の程度において多様であったばかりでなく、側副血行路の造影も多様であり、側副循環の発達が必ずしも良好と思えない症例もあった。

脳血管写所見の多様性に加え、flip-flop 現象は発症後 4 W をすぎてもみられるものがあり、さらに時間を経ると不明瞭になってくることも観察され、この現象は側副循環の発達を示すこと以外に、閉塞性脳血管障害の、特に急性期の病巣付近における Hemostatis 等により RI activity が遷延して現れる現象ではないかと推論した。

34. rCBF FI による大脳基底核部小梗塞症例の検討 —その CO₂ 反応性について

福永 隆三 高野 隆 林 隆一	(神戸掖済会病院・内)
白井 潤	
中村 雅一 鶴山 治 木村 和文	(阪大、一内)

基底核部小梗塞症列の局所脳血流量 rCBF を測定し、その CO₂ 反応性について検討した。対象は、神経学的所見・CT スキャン・血管造影所見などで、基底核部にのみ梗塞を有すると診断した 18 例である。rCBF の測定は、Xe 133 内頸動脈注入により、ガンマカメラ (Picker 社) とミニコンピューター (日立 EDR 4200) を用いて、initial slope 法にて算出し、rCBF FI を作製した。なお、Xe の血液組織間分配係数は 0.87 とした。測定は、安静時の他、自発的過呼吸負荷時・5% CO₂ air 吸入負荷時にも行った。結果：①安静時 18 例中 13 例に、